

## 教員採用と教員生活への私の迷夢

教職支援センター

教育学科特任教授 岸本芳信

### はじめに

平成 29 年 1 月 20 日、アメリカでは、いよいよトランプ大統領の出陣。他に最近の世界情勢を並べてみると、イギリスの EU 離脱、韓国の政情危機、キューバのカストロ死去……等。日本では、安倍政権の長期化、電通事件に端を発する働き方改革、天皇陛下の退陣論、横綱稀勢の里の誕生……等々、保護主義の台頭、過労死対策からスポーツの出来事まで、大小を取り混ぜて並べてみた。確実に、世界は、心は動いている。一方で、禅寺での座禅の警策が体罰・姿勢を正す指導がセクハラという報道にも目が留まった。また少子化が進む中、個人と集団の位置関係等、価値観の多様化もどんどん進んでいる。このような時代を俯瞰し、これからの教員に関して、勝手な私感を述べてみたい。

### 教員採用の将来

最近の教員採用状況を見ていると、本当の実力者の採用というより、教員採用試験対策に熟達した人の採用という感じがしないでもない。

先日、日本教育新聞（2016.3.28）の根岸前秋田県教育長の「教員採用試験と大学の学修」という記事の中で、「齋藤実則・元秋田県教育センター所長の教材観」として『小学校では東西南北 4 方角を習う。中学校では東西なども含めて 8 方角、高校では東南東なども含めて 16 方角を習う。では、小学校の教諭は、東西南北 4 方角だけを知っておればよいのですか』という文が目にとまった。教員の実力評価の上で、大いに賛同するところである。教員の資質等が語られ、教員免許をはじめ教員養成の在り方が問われているこの時期に、現状の筆記試験・面接試験等の在り方を含め、いま一度、本当の教育者養成を考えてみる時期が来ているのではないのでしょうか。

また、英語資格で有利に、学校図書館司書教諭資格で有利に、……採用試験で有利ということだけでなく、必要な資格等の所持者に手当をつけるなどと運用上での優遇を、他の資格も含めて考えたい。資格＝採用優遇ではなく、必要ときに力を発揮する、資格＝勤労意欲・実行力に繋げるような教員養成・採用をしてほしい。さらに、適正給料という面から考えて、調整手当だけで処理するのではなく、実質の仕事状況の把握とそれに伴う時間外手当とか振替休暇の取りやすさを考えて、教員のやる気を向上させてほしい。教員の仕事を単純に時間だけで評価するのはいろいろな問題もあろうと思うが、せっきく主幹教諭等の職もできたことなので、複数の階層から教員の指導・評価のできる体制を整えてほしい。教員が競争して力をつけることにより、子ども達の向上が見込めるし、フラットな教員集団だけでは、子どもは伸びないと考える。

また、複雑な社会情勢や価値観の多様な時代にあり、教員の仕事内容も授業から大きく広がってきている。いわゆる多忙感から、本来の仕事が手につかない、どうしたらよいか、……という状況になっている教員が多くいるようである。教職経験を観つつ手助けをする教員・分野を分けて、教育委員会や先

輩の教員が補助していく制度もあってよいでしょう。いずれにしても、「人間教員」を育てる手立てがほしいと考えている。

小人数学級の利点欠点・経済効果等の議論は他の研究を待ちたいが、ここでは一つの方策として、小学校教員の1クラス複数担任制を布いて、理系と文系の協働体制にすれば、授業もしやすいし保護者対応も少々しやすくなるを考える。経費面では、1クラスの数人が多少多くなっても可能であろうし、相手は講師の採用での対応も考えられるので、大きな経費増にはならないでしょう。同様に中学校・高等学校も副担任制度の充実を図ることにより、教員の多忙感の解消に役立つのではないのでしょうか。ただし、二人の間の人間関係には気を付けたいと考える。

次に、臨時講師の採用現状を見てみたい。団塊世代の大量退職時代を背景に、大幅な教員不足の地区もあり、多数の臨時講師が採用されている。そして、その講師の多くが担任を持っており、保護者や地域の不安感を誘っているように思える。臨時講師の採用においてもその方法の工夫を行い、例えば、しっかりと人物評価を行うこと等が必要であろう。保護者や地域との関係では、学校が中心になって、地域と学校との定期交流会等を開き、教員と地域の人が顔見知りとなることが協働の原則と考えるので、特に若い教員にとって、地域で活躍する場を得ることは、今後特に重要と考える。

#### 教員を目指す学生に望む

少子化の時代にあって、自分の周りで何でも言い合える人はごく少数であり、保護者の対応もいい面も悪い面も本人任せ、という家庭が増えてきているように感じる。したがって、他の人との意見の対立や対人関係の葛藤に悩む状況からはほど遠い状況におかれている。今後の対人関係の充実、いろいろな考え方を学ぶことが大切な時代となっているようだ。昔は、兄弟・親戚・家族・地域から学べた風習や立場を変えた考えの充実があったが、今は、積極的に働きかけないと学べない状況である。これらを考えると、次のようなことに留意しつつ教員を目指してほしい。

##### ① 趣味・雑学の勧め…教員としての幅の拡大

最近の学生は、教員採用試験のための勉強は熱心である。一方で、教員に、教員に、という思いが先行し、学びの余裕が減少してきているように感じる。目の前の学びだけでなく、教員＝人間としての幅広い教養と興味関心が、これからの教員生活、特に子ども達とのかかわりの中で有用となるはずである。何事にも前向きに頑張る教員の姿が、将来の発展には必要であり有意義になるであろう。

##### ② 業種の異なる友達の増加…

前述したように、個人を取り巻く人間関係が大きく変化してきている。その影響か、今まで叱られていない学生が急に叱られてその対応に戸惑っている姿、人間関係の対立に発展する姿に出会うことが増えてきた。兄弟親戚関係の存在が少なく、祖父母や親からの忠告も少なくなってきた昨今の状況では仕方のないことかもわかりませんが、人間関係上改善が必要なことである。

また、保護者や地域対応の重要な時代にあっては、対人関係力の向上が欠かせない。そのために、周囲に業種の異なる友達を増やすことも大事である。いろいろな立場からの意見を聞くことができ、保護者対応や地域対応の手助けの一部になるでしょうし、いろいろな人の意見や思いを聞き自ら考える参考になるでしょう。

### ③ よく言われる5者の顔を、受験勉強だけでなく幅広い人間力を

教員の幅の広さの必要性を表すいろいろな顔が論じられているが、主なものについて考えてみたい。

学者：まず一番重要なのがこの顔でしょう。子どもの質問は種類・内容を問わない。当然、身近なことから夢のようなことまでその範囲は膨大である。教員の高い専門知識が子どもの成長には欠かせないということは論を待たない。

役者：教員の表情や言動は、子どもの動きに変化をもたらす。時には、役者のように際立った振る舞いが必要である。発する言葉や間の良さから人を引き付ける役者の力を見習いたい。また、笑いは人間を元気にしてくれる。吉本の芸が、がん治療に役立つとの記事もあった。空気を和やかにする学級経営も、子ども達の間関係の成長に役立つものである。

記者：教員を目指している多くの学生が、学校時代の教員の影響を挙げている。一方で、教師のいい加減な行動が、子どものその後を左右する場合が多い。これは、記者の記事によって人の運命が左右されるのと同様かと考える。十分な教材研究、指導方法の学びが重要である。子どもに前向きな勇気を与えるか、苦悩の原因を与えるかの分かれ目である。

医者：医者が病状に合った適切な治療・薬で対応し病気がよくなったとき、患者はその医者に信頼を寄せる。一方、いくらいい人であっても病気が快方に向かわないならば、いい医者とは呼ばない。適切な助言・指導で「わかった、楽しい、おもしろい」と子どもが言うような教員になってほしい。

易者：人間は自らの進路に迷った時、案外易者や予言者に頼ることがあるものである。子どもにとっても、時には将来の夢や希望を語りかけ元気づけてくれる教員、そして、人生や生活上の戒めを語りかけ方向を示してくれる教員は重要である。

そのほかに、忍者、司会者、……。皆さんは何者を目指すでしょうか。

## 一般的な教員の仕事

教員を目指す学生の不安に応える形で、教員の仕事についての特集記事が、教員養成セミナー2016.10（時事通信社）にありました。この記事から、次の4点を拾ってみたので、その概要と各項目に対する私見を述べてみたい。

### ① 教員の仕事について

初任給については、調整手当と民間の残業手当を相殺すれば、大差がないとある。

しかし、仕事をよくする人とあまりしない人との違いが気になるところである。違いを明確にするには、管理職の部下教員の働きぶりを評価する力が大いに必要となる。そのシステムをどう構築するか。

### ② 職場の人間関係

先生の非常識は、逆に常識過ぎて、考え方のルートが似通っているのかも。自分から積極的に周囲とかかわりを持つとする姿勢が、良好な人間関係の構築に必要である。民間企業のようなピラミッド型の組織からはほど遠いとある。

このような組織で働くには、学生時代から、誰とでも話ができて、協働できる人間関係の力をつけておく必要がある。コミュニケーション能力・創造力も大事なスキルである。

③ 仕事の忙しさ

授業以外の仕事、例えば、生徒指導、部活動顧問、地域行事への参加など、多忙である。このことを生きがいや遣り甲斐につなげる人は、充実感を覚えているとある。

ということは、状況判断が的確で、物事に前向きに対応しようとする力をつけておくべきである。

④ 服装・髪型

必ずしもネクタイにスーツとこだわる必要はないが、化粧は派手でなく…とある。

子どもへの影響、親の目等を考えると、T・P・Oをわきまえることが大切であろう。

まとめにかえて（教職年報10年を振り返って）

いよいよ私の10年間の大学勤務が終わろうとしている。いろいろな思いや反省があるが、その折々に、教職課程年報に記録してきたことを、簡単にまとめて紹介したい。

以下に、教職課程年報のNo.、発行年月、私名義の記載事項の概要を記す。

① No.2 (H.20.3) : No.3 (H.21.3) : No.4 (H.22.3)

本学の教育実習生の報告書を基に、本学教育実習生の反省と課題、実習校の指導教員・校長の指導助言、学生の発見事項、弱点等についての抽出記録である。

② No.5 (H.23.3) : No.6 (H.24.3) : No.7 (H.25.3)

面接力向上のためにと題して、本学の教育方針の一つである「対話力の向上」、面接の基本対応、面接の種類と対策、面接の実際としての応答例の解説をした。

③ No.8 (H.26.3) : No.9 (H.27.3)

これからの教員への期待を、時代の流行語を冠し、「じえ・じえ・じえ」、「倍返し」、「お・も・て・な・し」、「今でしょ」から、期待する教員像を述べた。また、本来の教員の姿、キャリア教育、求められる教師力、として、教員成長のための方向性を述べた。

④ No.10 (H.28.3)

教員採用候補者選考試験の結果と今後の採用状況として、平成28年度教員採用候補者選考試験の本学現役学生の試験結果（過去10年分も）、全国の状況、今後の予測、本学学生の教育実習への対応状況と課題について考えた。

以上、過去の年報であるが、参考にしていただければ幸いである。

本学から、優秀な学生が多く育ち、より多くの学生が教員採用試験を突破して今後の教育者の中心となる人材として成長されることを夢見てペンを置きたい。

## 教育の真の担い手を輩出するために

教職支援センター

榎元 十三男

### 本学の教員養成の理念とその取り組み

今年度も多くの学生が教員採用試験に合格することができた。しかし、合格することが最終目的ではない。それは、教職を生涯の仕事としたいと考える学生にとってのスタート地点に他ならない。教壇に立ったとき、子どもに愛情を感じ得なかったり、やりがいを見出せなかったりするようなことが続くのであれば、潔く退く覚悟も必要である。子ども達にとって学校での生活は、一瞬一瞬が学びの連続であり、その無限の可能性を丹念に引き出し、自分の将来を切り拓く力を身に付けさせることが教師の役割だからである。時には妥協せず、真摯に向き合い、愛情をもって育てなければならない。そこでは常に自分を磨き、学び続けようとする力が問われることになる。それができなければ、自分を見失い、学校の主役であるべき子どもの姿さえ見えなくなってしまうことになる。

では、教師のやりがいを見出すにはどうすればいいのだろうか。その答えは4年間の学生生活の学修の中にあるといってよい。まず、本学の教職課程に関する学びの基本姿勢を見てみたい。

建学の精神を具体的な3つの言葉として示した『自立心』『対話力』『創造性』を培う教育は、正に現代の教員として必要とされる資質能力を培うことにつながっています。

これは、今年度作成された『神戸女子大学教職支援センター要覧』に記された文章である。さらに、教員養成の理念として以下のように続いている。

今日の教育課題に応えるために、①幼児・児童・生徒の多様なニーズを受けとめる教師の資質・能力とは何かを問い続けること②真に教師になるという姿勢を形成するための教員養成に掛ける意気込みを育むこと③教科指導力を育むために、指導実践力を育てること④生徒（生活）指導力を育むこと⑤幼児教育の実践力を育むことを目標としています。

また、教育学科においては、目指すべき教員像・保育者像が以下のように示されている。

#### 〈小学校教員像〉

##### 「自立心、対話力、創造性を持った教師」

- 教育者としての使命感と愛情を持ち、日々努力を積み重ねる教師
- 子ども一人一人の思いや願いを大切に、心豊かな成長を支える教師
- 確かな指導力を持ち、「わかる授業」を構成する教師

#### 〈保育者像〉

##### 「自立心、対話力、創造性を持った保育者」

- 高度な専門的知識と実践的技能及び幅広い教養を備えた保育者（H 27 教育学科会議録より）

改めて読み返してみると、ここには未来を生き抜く子ども達を育てるための教員を養成する理念が明確に示されている。それは4年間の教職課程の中に盛り込まれ、培われていく力である。

つまり、日々の教職科目の学修を地道に積み重ねていくことこそが教師の道を究めていく基礎・基本に繋がるということである。その意味では、本学での学びは教員生活を形づくるための土台の部分であるといえよう。それを学校現場に応用・転移していくためには、与えられたもののみの履修にとどまらず、また単に多くの単位を取得することに追われるだけでなく、自ら課題を求めて深く探究し続ける学びでなければならない。そこで身に付けた理論や実践こそが、教師という職業を選択したとき生涯を貫く教育観や指導観・人間観等に直結する力となって働き、花開くに違いない。

本学科の教職専門や教科教育法、実践演習などを参観する機会が何度かあった。小グループで課題に沿って熟議し合ったり、学生が主体となって作成した指導案をもとに模擬授業を行い互いに評価し合ったりする光景を目の当たりにした。そこででの学生たちの姿勢は常に主体的で、お互いがお互いを必要とするコミュニケーションを中核とした学び合いのスタイルであった。これは今まさに新しい学習指導要領の方向性として示されている「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点からの学習過程」に他ならない。教職課程の質の保証や向上が叫ばれている中で、そのことを意識し、積極的に改革・改善していこうとする前向きな実践を見ることができた。

学校現場で実際に教壇に立つと、上手くいくことより思い通りに行かないことの方が圧倒的に多い。相手は一人一人違う個性や特性を持った児童生徒であり、当然のことである。やればやるだけ新たな課題が生まれ、大きな壁にぶつかることもある。そんな時こそ、「自立」「対話」「創造」をキーワードとした本学での学びを思い起こし、新たな教育課題に立ち向かってほしいものである。そして、自分で選んだ教師の道を最後まで全うしてもらいたいものである。今までの多くの先輩たちも本学での学びに自信と誇りを持ち、学校現場での苦悩を喜びややりがいに変え、全国各地で活躍しているに違いない。

## 教職支援センター設置の目的とその役割

本学の教職課程運営の拠点として関係する事項を統括し、教職課程の円滑な運営を行うこと並びに学生の学校教育職員として必要な資質能力の育成・向上を目的に他に先駆けて平成19年度に開設しました。教育部門と事務部門が一体となり、目的達成のための体制を敷いています。

これも、『教職支援センター要覧』に示された支援センターの設置理念である。様々な議論を重ねながら学生が活用しやすいことを主眼とし、他に先駆けて開設され、10年が経過しようとしている。その間、いったいどれだけの学生が教職に関する相談をし、指導・支援・助言等を受けて巣立ったことだろう。教育部門と事務部門とが一体となって対応できる現在の活用状況から推察しても、その貢献度は計り知れないものがあると思われる。

今後も教職を目指す学生が安心と信頼の念を持って気軽に出入りできる空間とすべく、さらに改善や見直しの努力を重ねていく必要がある。とりわけ、教育部門においては、「学校教育職員として必要な資質能力の育成・向上を目的に・・・」の部分の具現化に努めていかねばならない。

## 教育職員としての資質能力の育成のために

学生が教師になった時、子どもの成長に喜びとやりがいを見出す原点となる力は、大学での教職課程における確かな学びの中にあることは前述の通りであるが、加えて支援センターにおいてもその力の醸成に積極的に取り組んでいるところである。

教員採用試験に関する主なサポート内容は、受験地の情報提供、自治体の説明会の開催、願書作成、集団面接、集団討論、個人面接、模擬授業、論作文、実技指導、過去問の提供、筆記試験の主な傾向とその対策などである。そこでは、短時間でそのノウハウを伝授したり、スキルを一律に身に付けさせたりすることだけに力を注ぐのではない。一つ一つの活動をくぐる中で教師という職業を自分自身の中に落とし込み、手繰り寄せていく過程を重要視している。その一例を示したい。

まず、学生自身が経験してきたことのこれまでの振り返り、自分の良さや持ち味や特技、合わせて短所や改善点等を再認識し、自分が教師に向いているかどうかをしっかりと見極めていく取り組みから始めていく。また、教師である前に社会人として、大人として子どもの前に立つとはどういうことなのかなどを熟考し、その上で、なぜ教師なのか、子どものどこが好きなのかなどを自分自身の言葉で表現できるようにしていく。そして、これからどんな力を身に付けていくことが必要かを共に考えていく。ここでは本学が目指し培ってきた「自立心」「創造性」が問われるところである。

また、支援センターの担当者が学校現場の経験者であり、チームを組んで学生の指導に当たっている。今学校で課題となっていること、多様な職務の内容、児童生徒や保護者への対応、同僚や先輩や外来者との接し方、分かる授業の在り方、児童を理解することの意味、失敗談、そして何よりも教師としての喜びややりがいなどを学生の興味関心に合わせて話し合い伝えながら具体的に指導できるところが強味である。学校現場では、子どもをはじめ人の思いを聞き取る力が求められる。ここでも本学が目指す「対話力」が発揮される場所である。教育はコミュニケーションが基本であり、集団面接や個人面接、模擬授業等の練習を重ねる中で身に付けていくべき資質能力である。

本学では、センター以外でもゼミや学科での学び合いや4回生から3回生への合格体験発表会等多くの学びの環境が用意されている。実際に教採をくぐった声には説得力があり、それを聞いて初めて心に火がつきやる気が出てきたという学生も多い。

## 改善していきたいこと

本学の学生たちは、確かな目的意識を持ち誠実で真面目で素直な子が多い。鍛えるほどに伸び代も大きい。学年が1つ上がるだけでその成長には著しいものがある。反面、自ら果敢に挑戦する意欲や積極性が薄い面も見られる。支援センターの活用も限られた学生に偏りがちである。入りにくさもあるだろうが、自ら求めて扉をたたいてほしい。その勇氣ある一歩が、合格はもとより教員としての資質能力の向上につながり、より良い教育の担い手となる近道となる。受け入れ育てる側としても、教職課程運営の拠点としつつ今以上に1回生からの切れ目のない学びを持続可能にし、建学の精神が求める人類社会の発展に貢献できる女性教諭を一人でも多く輩出したいものである。

## 校外での活動の一例—タバコの害と健康の講習について—

文学部 日本語日本文学科

教授 北山 円正

学校での生活は集団行動が基本である。授業・生徒会・部活動・集会・式典等々、校内での生活では一人であることがほとんどない。これに加えて学校外で実施する教育活動がある。遠足・社会見学・芸術鑑賞・部活動などの対外交流等々である。これらもおもにクラスを中心とした単位による教育活動である。ただ、学校という枠を外れる活動であり、必ず外部との接触を伴うので、相応の安全策を講じねばならない。また開放された場へ生徒を行かせるのであるから、秩序ある行動をさせる必要がある。もちろん校外での活動の意義や目的を、あらかじめ生徒に伝えておかねばならないのは言うまでもない。それでは校外の活動はどのように実施すればよいのであろうか。一例を挙げてその要領・方法を述べてみよう。

ある高校の全生徒約 800 人が、ある日の午後徒歩で 15 分ほどの所にある市民会館で、喫煙による健康被害を学び健康な生活を考えるために、啓発の短編映画を鑑賞し、専門家の講演を聞くと、行事の実施内容を設定しておく。

言わずもがなであるが、まず禁煙を呼び掛けることの意義を簡略に述べておく。日本における喫煙者数は、タバコによる健康被害が広く知られるようになったことや、嫌煙権の定着、分煙意識の向上、受動喫煙の害についての認識、未成年者にはタバコを売らない等々によって、かなり減ってきている。タバコの価格を大幅に上げる方針もあるというから、この傾向に拍車がかかることであろう。現在喫煙のマナーもかなり良好である。高校生の喫煙者も以前に比べれば確実に減少しているだろう。それでもタバコは嗜好品として存続するであろうし、未成年者から完全に切り離されているわけでもない。何らかの機会に吸ってしまうこともあるだろう。成長過程にある高校生にとって、喫煙が身体にいかほど有害であるかは言うまでもないが、つつい手を染めてしまうことはある。健康には百害あって一利なしであることを認識させ、将来にわたって健康意識を持ちつづけてもらわねばならない。

まず、保健衛生の校務に携わる教員たちによる実施案の作成から始まる。検討の上、実施の目的・内容・日時・講師の依頼・市民会館の借用・必要経費等々を決める。この計画案を文書などにまとめて学校長以下の教職員の了承を得て、周知を図ることになる。日程は、学年暦に盛り込む必要があるので、年度が始まるまでには決めておかねばならない。また、公共施設である市民会館はすぐには借りられない。1 年くらい前には予約しておくのがよいだろう。そうすると毎年ほぼ同じ時期に実施することになる。生徒に短編映画を見せるのであるから、ビデオやフィルムを入手し、館員に上映を依頼しておかなければならない。また、外部の講師を招くとするなら、当然のことながら事前に依頼し、講話の内容について打ち合わせておく必要がある。

計画にもとづく実施内容について述べておく。その日の午前中は通常授業を行い、午後から市民会館へ移動する。約 800 人の生徒が校外へ行くのであるから、一斉に出発するわけにはいかない。クラスごとに順次適当な間隔を空けて行かせることにする。この日はこの学外活動で授業は終わるので、終了後



は現地で解散すると設定しておく。そうなるを持ち物を携える生徒とそうでない生徒とがある。後者は部活動などのために学校へ戻る生徒である。いずれにせよ、教室の施錠等による持ち物の管理を呼び掛けておく必要がある。市民会館への途上、踏切や交差点・横断歩道などであろう。安全の確保と周辺への迷惑の防止に留意しなければならない。クラスには担任が付き添うのは当然として、それ以外に教員が要所に立って見守り誘導するのがよい。教員の目が光っていないと、これ幸いと脱け出す生徒もある一稿者の経験一。会館に到着して着席する。事前にクラスごとの座席を決めておかねばならない。会館には座席表があるので、それを用いて行事の担当者は各クラスの着席する位置を伝えておく。生徒が座って静かになるまではかなり時間がかかる。担任およびそれ以外の教員には適切な指導が求められよう。行事は、上映と講演の二部構成である。第1部の上映の後に休憩を挿む。ただ、一端生徒が席を離れると、次に全員が席について静粛になるまでには時間がかかる。教員の指導が必要となる。できれば休憩のない方がよいかも知れないが、それは所要時間の長さによって決めることとする。短編映画と講演の内容もさることながら、このような機会には集団行動におけるマナーを学ばせたい。第一にはよく見てよく聞くことである。いつもと違う施設へ来ると落ち着かなくなるものである。私語も出がちとなる。制止するのはむづかしい場合が多いが、自己の健康管理についての教育を効果あるものにするためには大事である。また、講演者の話に対して敬意を払わねばならないのは言うまでもない。日頃から話を聞く姿勢を説いておきたい。

高校生が公共施設でしでかすことは多々ある。いずれもあってはならないことである。上映中や公演中、座席は暗くなる場合もあるので、飲食をする生徒もある。その容器や包み紙を放置することもある。座席を傷つけたり、落書きをすることもある。その中でも情けないでき事を一つ紹介しておく。トイレの個室に入って内側の鍵を掛けて、ドアを越えて出て行くことがあった。その市民会館から嚴重に注意されたのは言うまでもない。詫びるしかない。公共の施設においては許されざる不始末であるが、なかなか防げない。公共の施設は信頼関係があって借用が可能となるのであり、これが失われると、以後団体としての使用が認められないかもしれない。ふだんの教育がどの程度のものかが現れたとも見なされよう。教員としては、まずその場では生徒の側において、様子をうかがっておくしかないのではないか。講演がすんで演者が降壇した後、行事の担当者が挨拶し、生徒に連絡等があつて終了となる。そして解散。約800人が一斉に席を立つと混雑する。行事の担当者が、順次館外へ出るように誘導しなければならない。

以上は、生徒全員が学校を出発して、公共施設を利用して行う行事の一例を挙げて、その意義・内容や方法・手順・役割分担等を述べてみた。このような行事は毎年実施するので、その要領はほぼ決まっているだろう。教員にもどういう行事であるかはすでに分かっているはずである。とは言え、行事がどうあるべきなのかは、実施結果を検証しながら折々考えておくべきであろう。

# Reading I/II, Writing I/II, Oral Presentation I/II, Advanced English Seminar

Department of English  
Associate Professor Marsha Hayashi

In this paper I will explain the classes in the Intensive English Program that I am teaching to first, second and third year students. In particular I will explain Reading I/II and Writing I/II for first year students, Oral Presentation I/II for second year students and Advanced English Seminar for third year students. First I would like to explain the aim of each class, second how I am teaching the classes and lastly the results being achieved.

In the first year I teach Speaking/Listening, Reading and Writing. Classes are taught in English and there is an English only policy for students. These classes are taught separately, but with an interdependent focus. The aim of Reading I/II is to give students practice in reading both short and long passages for comprehension and fluency and to develop study skills for vocabulary development. The aim of Writing I/II is to give students practice in developing writing skills for practical purposes on a variety of topics as well as learning the basics of writing for research purposes.

In the second year I teach Oral Presentation I/II. The aim of Oral Presentation I/II is to study speaking and listening intensively in order to develop vocabulary, understand common expressions and practice proper usage of grammar. Students also give short talks based on topics in the textbook. This class is in preparation for the third year Oral Presentation classes, which result in full power point presentations.

In the third year I teach Advanced English Seminar I/II. The aim of Advanced English Seminar I/II is to examine a foreign society and culture in depth. After studying various aspects of culture, students choose a research topic that they are interested in and produce a research paper. One research paper is required each semester.

Next I would like to explain how I teach the classes. As I previously stated, Reading I/II and Writing I/II for first year students are separate classes, but are taught interdependently with Speaking/Listening classes. Speaking and Listening is taught as one class, Reading is taught as one class and Writing is taught as one class as well. The three classes have the same students in them. One textbook and workbook is used to teach the four skills in these three classes. Students sit in pairs and have a different partner for every class period.

In Reading I/II, I have students read the reading passage in the text and answer the questions. Students work with a partner or in groups to check their answers. With a long passage I will usually divide the class into two groups and have half of the group read one section and the other half read the other section. Each group will answer questions about their own section. After checking their answers with their own groups, I will have them pair up with someone from the opposite group. Using

the answers to their questions, they must explain what they read to their partner. While reading a passage, I ask students to circle any new words. I then go around and ask them to tell me what they are. I write them on the board and go over the meanings. I ask students to make a vocabulary notebook and write down new words and their meanings as well as practice pronouncing them. I then have students practice reading out loud by themselves and together as a class and one by one for the class. I encourage everyone to make a vocabulary notebook.

In addition to this, I require that the students read at least 50,000 words using "Graded Readers" outside of class as homework each semester. Students are required to take an online quiz for each book they read and I require book reports for six books. Every two weeks they hand in a book report. Each student first introduces her book in a group and then introduces the book to the whole class. The student introduces the title, level, publisher, number of pages, a brief description of the story and whether she recommends the book or not. I then ask a brief question to each student about their book. Afterward each student is asked which book sounded interesting to them and what they would like to read. They must tell me the title and if in doubt, their classmate tells them again. They read many more than six books for the online quizzes, to reach the goal of at least 50,000 words.

Writing I/II is often connected to topics we have done in the Speaking/Listening and Reading class. Students read sample writing in their textbooks and answer questions. Students are taught symbols, which I use when pointing out mistakes in their writing. For example, T= tense, Prep= preposition, Gr= grammar, WO=word order, WW= wrong word, P= punctuation and SP= spelling. Students think about and correct their own writing. Students are asked to write and type a first draft which I correct using the symbols described previously. Then they are required to write and type a second draft. Students have a midterm and final examination. Examples of kinds of writing are blogs, email, storytelling, biography, writing an opinion, describing a place and a person, writing about pros and cons of a topic, a town or city, how to link ideas together and a thank you note.

In addition to this, I have students write in a journal weekly. I collect the journals and write a reply. During vacation times students write five or six entries in their journal. This is free writing and I do not correct it.

Oral Presentation I/II is taught to second year students. I start this class with pair work. Students greet their partner and ask what's new? I then ask each student to speak about what's new and I ask questions. We then start work in the text. The majority of the class time is spent speaking with a partner. Students are asked to speak and give opinions based on exercises in the textbook. They are also asked to give a short talk in English on assigned topics. Students join overseas programs in the second year, so some students are preparing to go abroad in the second semester and some students join the class in the second semester after studying abroad in the first semester. Some topics covered are ice breakers and how to meet people and make friends, the workplace and the types of jobs available, hobbies and interests, how students use their time for everyday tasks and playing games and

sports. This class is in preparation for the third year Oral Presentation III/IV classes in which students make power point presentations resulting in an Oral Presentation Contest. A midterm and final examination is given in this class.

In Advanced English Seminar, taught in the third year, students study about a country and its culture. In my class we study about present day issues such as the family, education and healthcare in the United States. Using a DVD and a textbook, we examine various social issues. Students write a one page paper, typed and in English on each issue. For example; issues examined are healthcare and the insurance system, divorce and consequences for children, remarriage and blended families, and education in inner-city schools. The one page papers are based on questions I give students about the movies we watch. Students discuss their opinions in class based on the one page reports they have written as homework.

Students also learn about the states and their locations. 2016 was an election year in the U.S., so students could follow the voting state by state on the Internet or television. In addition to the textbook, students read additional books about American history and culture in class and take notes from them in preparation for their main research papers. A one thousand word research paper in English is required each semester. Students can choose the topic that they are interested in. The students and I discuss the topics to determine whether they are appropriate, not too wide or too narrow. Students are required to give credit for all materials used, both text and web, in a "Works Cited" page at the end of their paper. Examples of titles previously chosen were the U.S. Presidential Election, School Lunches in the U.S. and Japan, Redwood Forests in California, Ivy League Universities and American Independence, among many others. Students start by writing an introduction and then discuss with me what will be three major points they would like to research about their topic. Students work for several weeks refining their papers and complete them in the second to the last week of the semester. In the last class, students speak to the class about their research.

Finally I would like to explain about the results achieved. In Reading class students read a large quantity of "Graded Readers." Some may read as many as 40 books. These are all recorded online and I can look at their progress at any time. Although the goal is reading 50,000 words a semester, some students read two or three times this amount or more. Almost every student achieves the goal of 100,000 words for the year. As for the textbook reading, students learn to read faster and pay attention to the details. They also become more aware of vocabulary and the importance of making a vocabulary notebook to help them review and retain vocabulary.

In Writing class, students seem to make great progress. Many of them did not know how to write in paragraphs when they started and seemed to write sentence by sentence, not following the line all the way from left to right. They learn how to connect and combine sentences and the importance of bringing organization and logic to their writing. They also learn how to describe things using detail and how to link ideas together. They get practice in English typing which is time consuming at first,

but gradually becomes easier. Through their journal writing, students come to be more fluent and faster writers. Many students seem to enjoy writing about what is meaningful to them.

In Oral Presentation class students improve their speaking ability and become motivated to speak with more confidence about their opinions. Students who are going to study abroad become highly motivated to practice in preparation for life in a foreign country. Those students who join the class in the second semester after studying abroad, bring their new- found ideas to the classroom discussions. Having each student speak about their news at the beginning of each class helps me to know what is going on with each student; to see their progress or any problems and is a good way to set the tone for the class.

In Advanced English Seminar, students are given the opportunity to study about a subject in English. The main focus is on the content and how the student can understand the subject matter. Students are introduced to things that may be completely new to them, and they are asked to research things that they are interested in. A focus is put on writing and students learn about writing for research purposes. This is good preparation for the writing they will do in their fourth year when they write their graduation thesis. Students also have to explain to their classmates what they have researched, which is an added challenge for them as they decide on what are the most important things they would like to tell others. Students seem to enjoy listening to their classmates' presentations on various topics that are new to them.

## 英語教員のための「英語史」を考える —助動詞 do の場合—

文学部 英語英米文学科  
准教授 南 佑 亮

「英語の教員は英語のことをよく知っていなければならない」と言えば、当たり前ではないかと思われるかもしれない。しかし「英語のことをよく知っている」ことは「英語が使える」こととは異なる。英語が必要な職業は数多あるが、ほとんどの場合、「英語が使える」だけで事足りる。しかし、英語教員は英語が使えるだけでなく、英語のことをよく知っていなければならない。生徒から英語学習の中で生じた素朴な疑問を投げかけられた時に、当意即妙に答えられなければならないからである。

「英語史」を学ぶのはまさにそのような「英語のことを知る」という領域に属する営みであり、英語教員（を志す人々）にとって切実な意味を持つ。とはいえすべての英語教員に英語史のことを隅々まで熟知しておくことを求めるのは非現実的であるため、誰かが、英語史に関して英語教員が是非とも知っておくべき事項を適切な形で挙げる仕事を引き受ける必要があり、その「誰か」として最も適任なのは、言うまでもなく英語史の専門家である。そして現に、日本の英語史研究者の間でそのような趣旨の試みが始まっている。雑誌『英語教育』2014年9月号における「英語の『なぜ』を解きほぐす 指導に役立つ英語史の知識」という特集は記憶に新しい。堀田（2011, 2016）は現代英語の特徴についての素朴な疑問を提示しそれに英語史の観点から回答していくというスタイルを取った本であり、各時代の英語の文法的特徴を時系列に沿って網羅的に見ていくという従来英語史入門書とは一線を画している。

こうした試みはもちろん歓迎されるべきである。ただし、学ぶ側から出されるであろう素朴な疑問に集中するあまり、そうした素朴な疑問の対象にはなりにくいが是非とも知っておくべき重要事項を取りこぼさないように注意する必要がある。そのような事項の一例として、本稿では「助動詞の do」を挙げておきたいと思う。否定文 (*I don't play baseball.*) や疑問文 (*Do you play baseball?*) でよく姿を見かける、あの do である。実は、この do は上述の特集でも堀田（2011, 2016）でも取り上げられていない。特集の方はわからないが、少なくとも堀田氏は助動詞 do の歴史を重要視していないわけではなく、氏のブログ（「英語史ブログ」）では、助動詞 do について複数回に渡って詳細に取り上げている。同書で助動詞 do が取り上げられていないのは、この現象が「素朴な疑問」の対象にならないと判断されたからであろう。疑問の対象にならない理由は、おそらく、この do が中学校の英文法で最初期の段階で be 動詞と一般動詞という動詞の 2 つの類型が登場した時に、一般動詞の項目の否定文・疑問文のところできりげなく導入されるため、その存在の不思議さに気づくのが難しいからであろう。

では、そのような素朴な疑問を呈される可能性がほとんどない助動詞 do の歴史的背景について英語教員は特に理解しておく必要はないのだろうか。そうではないと筆者は考える。その根拠として、助動詞 do が特異な助動詞であることに気づき、そうなった経緯を英語の歴史的变化を踏まえて正しく理解することの重要性を以下で指摘する。

ここまで「助動詞 do」という名称を当然のように用いてきたが、実はこの do が助動詞の一種である

という認識を持たない人が（かなり英語に習熟している人の間でさえ）多いのではないだろうか。この do は、いわゆる「be 動詞」「完了の have」と共に助動詞のカテゴリーにまとめられ、江川（1991）の「動詞」という章の中に be, have, do の 3 つの動詞をまとめて扱う節があることからわかるように、現代英語の文法体系の中で重要な一角を占める。確かに、be も have も do も、否定辞 not が後続し、疑問文その他で主語との間で倒置を起こす。

では何故、do だけが助動詞と認識されにくいのか。最大の原因は、他の助動詞と違って助動詞の do は通常の肯定平叙文では現れないことにあると思われる。肯定平叙文はいわばデフォルトの文タイプであり、学習者は、特別な事情がない限りは否定文や疑問文よりも先に想起するし、特定の文法カテゴリーについてもまずは肯定平叙文を素材にして理解しようとする。「助動詞」というカテゴリーもそのように捉えた場合、そこに現れない do はどうしても目立たない。さらに悪いことに、この do には意味内容らしきものがない（それゆえ「統語的ダミー要素」と呼ぶ文法理論もある）。他の助動詞は、それ自体が何を表しているかがはっきりしている。法助動詞 (*can, may, must* 等) はモダリティの意味を表し、完了の have は動詞の過去分詞形とともに完了アスペクトを表す。be 動詞はコピュラとしての機能を果たし、いわゆる第 2 文型 SVC における V を担う代表的動詞でもある。ところが、助動詞 do が何を表しているかと問われても誰も容易に答えることができない。このように助動詞 do は助動詞の中で特異な位置を占めているのである。

do がこのような特異な位置を占めることになった理由は、英語史を紐解くことで初めて明らかになる。助動詞 do は 1500 ~ 1700 年頃にかけて次第に定着していったもので、元々、英語の文法体系の中には存在していなかった。それが、法助動詞をはじめとする助動詞が数多く発達してきたこと、屈折の消失に伴い SVO の語順の固定化が進行しつつあったことが原因で、必要に迫られて登場してきたという経緯がある。以下、宇賀治（2000）や寺澤（2008）等を参考に、この経緯についての英語教員向けの記述の試案を示しておく。

助動詞の数が増えると、助動詞を伴う文の使用頻度が上がり、否定文・疑問文の中にも助動詞をとまなう文の割合が増す。語順は SVO に固定化する方向に進んでいるので、自然に、語順に関する助動詞の文法的特徴が確立していく。それが、疑問文では主語と倒置することであり、否定文では否定辞を直後に従えることであった。ところが、当時はまだ助動詞のない疑問文や否定文が存在した。現代英語では助動詞 do が登場する場合のことである。この状況下では、疑問文の語順規則は「疑問文では助動詞と主語が倒置する (*Can you play baseball?*)」。ただし助動詞を欠く場合は本動詞と主語が倒置する (*Play you baseball?*)」、否定文の語順規則は「not が助動詞に後続する (*I cannot play baseball.*)」。ただし助動詞を欠く場合は本動詞より後ろに not が現れる (*I play not baseball.*)」、という一貫性を欠くものになる。この望ましくない状況を解消しようとする力（専門的には駆流 (drift) と言う) が働き、「助動詞を欠いた疑問文・否定文」をなくすために助動詞 do が導入された（安藤 2007: 187 等）。こうした背景があるため、do は文法体系を維持するためだけに貢献する純然たる統語的操作詞 (operator) で、独自の意味内容は持たないのである。また、この do の導入には利点があった。疑問文においては SVO という語順を崩さないでいられるし、否定文においては否定辞が助動詞の直後に入ることによって V と O の間の隣接性を確保することができる。この観点に立てば、肯定平叙文では助動詞 do は確かに不要である。

語順規則は特に一貫性を欠くこともなく、doがないことでSVO語順の成立に齟齬をきたすこともないからである。かくして、助動詞 do は疑問文・否定文においては文法体系の変化に伴う要請によって発達したが、肯定平叙文では発達しなかった。

無論これはかなり「粗い」説明である。まず、助動詞 do が元は使役動詞で、そこから再分析が起こって助動詞 do の構造が出来たという定説が省かれている。また、寺澤（2004）が指摘するように、上の解説では助動詞 do が疑問文において最初に定着したという事実が説明できないし、平常肯定文の do についての事情も、実はもっと複雑である。安易な因果関係を見出しすぎることに気を付けなければならない。しかし、現代英語をよりよく理解するという目的にとっては、そうした詳細な事項よりも、英語の大きな特徴である語順ルールの厳格さと助動詞 do の間の意外な関係を理解することの方が重要であると考え、このようにした。筆者自身は本学の「英語史Ⅱ」の授業で助動詞 do を扱うようにしており、その際には必ず上記の内容は含めるよう心掛けている。

以上、本稿では、現代英語に関する素朴な疑問に答えるという趣向の堀田（2011, 2016）では対象とされていない助動詞の do を取り上げ、素朴に疑問に思うことはないけれども重要な文法事項にもアクセスできる道筋を英語史の方からも提供することの必要を論じた。勿論、英語史を学ぶ意義はこの他にもある。例えば、国際共通語としての地位を固めつつある英語が実は通言語的に見てかなり特異な特徴を多く有する言語である（角田 2007）ことを正しく知るためにも英語史は大いに役立つと思われるが、これについては別の機会に譲ることとしたい。

#### 参考文献

- 安藤貞雄（2007）『英文法を探る』開拓社、東京。  
宇賀治正朋（2000）『英語史』（現代の英語学シリーズ第8巻）開拓社、東京。  
江川泰一郎（1991）『英文法解説 改訂第三版』金子書房、東京。  
角田太作（2007）『世界の言語と日本語 改訂版』くろしお出版、東京。  
寺澤盾（2004）「助動詞 do の文法化」『言語』第33巻第4号、42-49。  
寺澤盾（2008）『英語の歴史—過去から未来への物語』中公新書、東京。  
堀田隆一（2011）『英語史で解きほぐす英語の誤解—納得して英語を学ぶために』中央大学出版部、東京。  
堀田隆一（2016）『英語の「なぜ？」に答える はじめての英語史』研究社、東京。  
『英語教育』2014年9月号（第63巻第6号）、大修館書店。  
hellog～英語史ブログ（<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/>）



## 教科書の活用とアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善

文学部 英語英米文学科

助教 本田 隆 裕

学校教育法第34条には、「小学校においては、文部科学大臣の検定を経た教科用図書又は文部科学省が著作の名義を有する教科用図書を使用しなければならない。」と定められており、この規定は、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校にも準用されている。従って、高等学校の特別な科目を除いて、中学校・高等学校の英語の授業では文部科学省検定済教科用図書（教科書）を使用しなければならないと、多くの教育現場で教科書の記述に沿って授業計画が立てられていると考えられる。

このことを踏まえ、私が担当する英語科指導法Ⅰ～Ⅳの授業内での受講生による模擬授業では、中学校または高等学校の教科書の見開き2ページ分を示し、その箇所を指導する授業を計画し、実践してもらうことにしている。なお、中学校・高等学校の教科書の見開きページの掲載内容はおおよそ次の3つから構成されている。(1) 英語で書かれた会話文または論説文、(2) (1)の英文により初めて導入される語句、(3) (1)の英文により初めて導入される構文や時制・相などの文法事項、である。このような教科書構成の中で模擬授業に取り組む学生が最も注意を向ける対象は(3)であり、極端な場合、文法的な説明だけが教える側の仕事だともいうような模擬授業を展開する学生もいる。そのような授業は、学ぶ側（生徒側）からすれば記号操作のみの単調な学習で、要点はまとめられているものの、学習した内容を実際のコミュニケーションでどのように活用すればよいのか不明であり、生徒にとって主体的な学びの場とはならないと考えられる。

このような模擬授業が展開される原因は2通り考えられる。1つは、模擬授業を行う学生自身が中学生・高校生の際にそのような授業を受けてきたため、そのような授業のイメージしか描けないのであろう。もう1つは、当然ながら教員としての実務経験がないため、学ぶ側の視点に立って考えることができないことに起因していると考えられる。そのような学生の中では、一通り中学校・高等学校の英語学習を経験した立場から、中高の英語の教科書を見た時、それぞれの見開きページの中で学ぶべきこと（あるいは自分が中高生の時に学んだと思うこと）が上記(3)の箇所にまとめられていると感じ、その箇所さえ理解できればよいという錯覚が生じていると考えられる。一通り学習を終えた立場からすれば、教科書に載っている文法説明はただの復習かもしれない。また、自分自身が学ぶ側だった時にどのようにその文法事項を習得したのかということは思い出せないことの方が多いだろう。しかし、その文法事項を理解し、実際のコミュニケーションの場で活用できるようになるまでの過程こそが教える側としては重要なものであって、学ぶ側の能力にもよるが、教える側が自分の知っている文法の知識を説明するだけではただの独り言になってしまう可能性も十分あり得る。知識そのものよりも、学習者自身が知識を身につける過程に注意して授業を組み立てる必要がある。

現行の学習指導要領では、文法はコミュニケーションを支えるものとされており、言語活動と切り離されるべきではない。従って、教科書のうち上記(3)に力点を置くのではなく、(1)にこそ意識を向けるべきなのである。それぞれの会話文や論説文には何らかのメッセージ（異文化理解や現代社会の問題など）

が込められているはずである。そのメッセージを読み取ったり、同じような内容を自分から発信したりする活動を通して、その内容の読解・発信に必要な文法事項を学んでいくことが理想的であり、それが実現できれば英語の授業をただの記号操作の時間にしなくてもすむ。残念ながら、各教科書は紙面の都合のためか、掲載している英文の量が極めて少ない。教科書本文の活用はもちろんだが、足りなければ指導者自身で英字新聞の記事を取ってきたり、英語母語話者の協力も得ながら自分で作文をしたりして、たくさんの英文を用意し、提供する必要がある。よく誤解されがちだが、アウトプット活動の時間を多くとればコミュニケーションな授業になるわけではない。十分なインプットを受けて英語表現の形式・意味・機能を理解した上でアウトプット活動が行われなければ、記号操作の域を出ないと思われる。アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が求められるようになってきているが、主体的に英語を学ぶためには、学習する表現の形式・意味・機能の言語3要素を理解する必要がある、そのためには十分なインプットが不可欠である。よって、今後は教科書本文およびそれに関連する英文を活用する能力が今後の中高英語教員に求められるようになるだろう。

最後に、学習者の主体的な学びを促すためのアウトプット活動についての一案を述べておきたい。例えば、現在完了形の継続用法を指導する模擬授業では、学習者自身にずっとしていることを何か考えさせ、それを英語で述べさせるといった展開をよく見かける。アウトプット活動では、指導者側から何らかのお題を出すことは避けて通れないことだが、学習者側から見れば何の脈絡もなく自分が継続して行っている行為を述べさせられることは、よく考えれば極めて不自然な状況である。同じ現在完了形の文を出力させるにしても、例えば、「自分が継続して取り組んでいることを含めて自己PR文を作成しよう」といったように、何らかの目的を追加した活動にすれば現在完了形の形式・意味だけでなく、言語機能も理解でき、より主体的に自分の情報を英語で発信することが可能になるのではないだろうか。(もちろん、現在完了形の継続用法の言語機能は他にもあると思われるが、形式の習得以外の目的を加えることで記憶にも残りやすいと思われる。)中学生は特に語彙が少なく、アウトプット活動が制限されがちだが、教科書には上記(1)~(3)以外にも、アウトプット活動の例やそのための表現も掲載されている。教科書に載っているアウトプット活動は無味乾燥であることが多いが、表現だけ教科書の情報を活用して、活動そのものは学習者の実態に合わせて指導者側が創意工夫すればよい。教科書の文法事項ばかりに目を奪われるのではなく、教科書を上手に活用することが学習者の主体的な学びを可能とし、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を可能にすると考えられる。

## 〈答えのない世界〉を教える

文学部 神戸国際教養学科

教授 狩野 恭

これから先生となるであろう貴女が幼稚園児や小学生・中学生に対する前に、まず考えてほしい。何を教えられるのか、何を教えられないのかではなく、何を教えるべきで、何を教えるべきでないのかを。以下は、先行き不透明な現代にこれから生きる子供たちに接する貴女たちへの筆者からの希望である。

まず第一に、基礎知識をしっかりと教えてほしい。その際、考えてほしいのは、①どれが正確な知識か？②どれが基本的でどれが些末な知識か？③楽しく学ぶ方法はないか？④80%の定着を目指す。以上の4点である。日本語でも、英語でも、数学でも社会でも、理科でも体育でも音楽でも。どの知識が最も基礎的で、どれは抹消的な知識であるのか、それを分別して教えるのが先生の役目であると思う。その判断を誤ってはならない。そして、基礎知識の学習は退屈な場合も多いので、できるだけ楽しく覚えられよう工夫したい。そこは、貴女たちの腕のみせどころである。十二分に腕を発揮してほしい。さらに、基礎知識は正確でなければならないが、100%クリアしてくれなくてもよい。80%クリアしてくればなんとかものになる。なかなか難しいが、根気よく、根気よく、根気よく教えてほしい。

第二に、人間にはわからないこと、不思議なこと、答えのないこと、答えが無数にあること、そういう世界がこの世の中にあることを教えてほしい。ある年になって、スマホやインターネットが使えるようになれば、わからないことは検索してすぐ〈答え〉が出てくる。いや、〈答えらしきもの〉が書いてある。問題集にも〈答え〉が載っている。人間の〈学ぶ〉という行為においてこれほど危険なことはない。簡単に学んだことは簡単に忘れるからであり、知識にはそこにたどり着くプロセスが大切だからである。そして、いつも、答えがどこかに〈ある〉という幻想を与えてしまう。これが危険だ。なぜなら、すぐに答えが出ないような問題に直面したときに、我慢する力がなくなるからである。〈じっとためて考える力〉が養われないのである。知的活動に最も必要な資質のひとつは忍耐力である。それを養うような教育を目指してほしい。そして、この世界には、わからないこと、不思議なこと、答えのないこと、答えがたくさんあること、そんな世界がひろがっていることを教えてほしい。題材はいくらでもころがっている。

第三に、教えすぎないでほしい。知的好奇心を育てるためには教えすぎはいけない。いつも〈もの〉であふれている社会で、〈もの〉の貴重さを教えることは難しい。じっとしていても、いつも「何かを与えられる。自分は与えられたものの中から何か得になるものを選べばいい。」そういう人間を作り出してはいけない。赤ちゃんをあやすときに〈イナイナイバー〉というのがある。最初から〈バー〉では人間は成長しないのである。今「アクティブラーニング」などという言葉が使われているが、もともと知的活動はアクティブに決まっている。学びたくなくても学ばされてしまうことが人生にはあるが、それでも、受動的体験から〈何か〉をくみ取ろうという意志がなければ、経験は単なる体験で終わり経験知として蓄積されない。〈知りたい〉〈学びたい〉という態度を育てることこそが教育の核心であるように思うが、そのためには、「教えない」ことも、別な意味で「教える」ことになるのではないだろうか。

以上3点、教育に携わるなら是非考えてみていただきたい。

## 教職をめざす努力

文学部 史学科  
教授 小林善文

史学科では、小説や漫画、テレビ番組がきっかけとなって歴史に興味をもったとか、親の影響で歴史が好きになったとか、入試の面接で答える受験生が多い。また中学校の社会科や高校の日本史・世界史の授業を担当した先生の話がおもしろくて、社会や地歴の教師になりたいといって史学科に入学し、教員免許状の取得をめざす学生も少なくない。

教職をめざす学生は、けっこう忙しい教職関係科目の履修と単位取得を経て、教育実習に臨むことになる。多くは母校に受け入れてもらえるが、それでも緊張して疲れる教育実習の2～3週間を過ごすことになる。その間、指導教員や他の受験生の授業見学、SHRやLHRでの指導などを経験するが、その他の時間の多くは教材研究や指導案作成、実習ノートの記述などに当てることができる。ただし、指導教員の日常の仕事を見ていると、勤務時間内に教材研究をする余裕などは全くないといってよいほど多忙である。

教職実践演習の授業を通して、私は教員の勤務の多様性を実感してもらうよう努めている。学生の多くは、教育実習の緊張と疲労の日々を終える頃、生徒たちとのふれあいを通して教員になりたいとの思いを強めていると思う。教育実習は、教員採用試験の受験が前提となっている。実習を終えた頃には、採用試験が間近に迫っている。試験を受けてみて不勉強を実感する学生が多い。

教員採用試験の合格に近道はない。どのような姿勢で準備していくべきか、私見を述べたい。史学科の学生を見ていると、特定のテーマや人物に関心をもち、関係する書物や史料にのめり込んでいる人が多い。しかし、教壇で教えるには広い視野と広範な関心、それを支える知識が不可欠である。そのためには勉強しかないが、効果を上げるには、計画はもちろん必要だが、実践するための集中と持続が欠かせない。現役で教員採用試験に合格した学生を見ていると1回生から計画的に勉強をしている。ただし受験勉強をするだけでは、おもしろくない。広く知識を得るには、世界の動きに関心をもち、知らないことを知ろうとする好奇心が大切である。

現在では、IT機器を活用して手軽に知識を得ることができる。しかし、知識を体系化することは容易ではない。人間にとって身体で覚えることが出発点であり、帰着点となる。さまざまな知識を自分なりに図式化することは、体系化する上で欠かせない試みである。見る、読む、書くといった基本的な作業を重視することで、知識を自らのものとしてほしい。ネット社会になるとともに新聞を購読しなくなる傾向も強まっているが、やはり新聞は読んでほしい。かつて使った高校の教科書は、基礎的な一般教養を確認するために便利である。教壇では十の知識をすべて語るのではなく、そのうちの二、三の知識を選択して語ることでより良い授業が実現できる。それを選択するためにも、バランスのとれた広い知識が必要となる。自らの血となり肉となる知識を得ることは、教員採用試験をめざすためだけでなく、今後の人生を豊かにするためにも大きな意味をもっている。各界で活躍しているリーダーをみると、若い頃に猛烈に勉強した経験をもつ人が多い。みなさんの努力を期待している。

# 学生の主体的な学びを促す特別活動論の授業の取り組み —ワークシートの活用と意見交流を取り入れて—

文学部 教育学科  
准教授 佐藤 浩 樹

## 1 はじめに

筆者は、平成26年度からポートアイランドキャンパスで、平成27年度から須磨キャンパスで教職課程の特別活動論を担当している。履修者はポートアイランドキャンパスは栄養教諭・養護教諭免許状取得希望者、須磨キャンパスは中・高教諭免許状および栄養教諭免許状取得希望者で、平成28年度の履修登録者はポートアイランドキャンパスは45名、須磨キャンパスは99名である。両授業とも学生の主体的な学びを促すために毎回ワークシートを作成し、意見交流させる場を設けている。ワークシートの内容は、特別活動について実感的に理解し、特別活動の指導のあり方や取り組む姿勢について考えるものが中心である。本稿では、平成28年度の須磨キャンパスにおける特別活動論の授業での取り組みについて論じる。

## 2 ワークシートの内容とワークシート活用の概要

授業で活用するワークシートはA4判1枚を原則とし、毎回3、4個の項目を取り上げて書かせるようにしている。書かせたことは必ず席が近くの学生と交流させ、何名かは指名して全体に向けて発表させる。発表に対して感想を求めることもある。大教室での授業であるが、学生とのやりとりや学生同士の意見交換を重視している。また、ワークシートの最後に授業の感想の欄を設けている。ワークシートは毎授業後に提出させ、次回の授業で記述された内容や感想の中から何点か取り上げて紹介・解説するようにし、双方向的な授業を心がけている。ワークシートで取り上げた項目は、大きく以下の5つタイプに分類される。

- ①自分の経験を振り返って書く
- ②テーマについてどんなことなのか予想や考えていることを書く
- ③テーマについてどう考えるか自分の考え（論）を書く
- ④テーマについてどうしたいか自分の考え（プラン等）を書く
- ⑤授業内容や活動を通しての学びや感想を書く

第3章では①～⑤のタイプの項目ごとにその意図と具体例について述べていく。

## 3 ワークシートの内容についての考察

### (1) 自分の経験を振り返って書く

学生は特別活動の具体的な内容をなかなかイメージできないため、特別活動の体験をまわりの学生と交流したり全体に発表したりして授業で取り上げる特別活動の内容の共通理解を図ってから授業に入るようにしている。共通の基盤ができるため授業に入ってからこれない学生が少なくなる。自分の体験を話す

こと、友達の体験を聞くことは学生には好評であり、ワークシートの枠一杯に書く学生も多い。自分を見つめ直すこともでき、人間関係づくりという特別活動の特質にもつながる。ワークシートで取り上げたのは、例えば以下のような項目である。

- ①学校生活で思い出に残っていることはどんなことか（第1回「特別活動とは－内容・目標－」）。
- ②自分が所属する集団の中で、その集団の一員である意識が強い集団はあるか。その集団から影響を受けている見方・考え方、価値観、行動様式などはあるか（第3回「集団活動論」）。
- ③対人認知の誤りの要因の中で自分がやりがちなものはどれか。具体例も挙げてみよう（第5回「対人認知と対人行動」「特別活動論の指導原理」）。
- ④本当にうれしかったり、やる気が出たり、自信になったりした先生からの言葉・場面はあるか（第14回「教師の人間関係づくり」）。

## (2) テーマについてどんなことなのか予想や考えていることを書く

授業の導入として、授業で取り上げるテーマについて自分の考えを各自確認し、交流・発表して共有化した上でそれと関連しながら授業を展開している。このことにより学生が自分との関わりで授業に主体的に取り組めると考えている。ワークシートでは、例えば以下のような項目を取り上げている。

- ①教科外の活動が学校教育で行われるようになったのはなぜか（第2回「特別活動とは－歴史－」）。
- ②リーダーにはどんな資質が必要か（第4回「リーダーシップ論」）。
- ③学級活動の指導で大事なポイントはどんなことか（第10回「学級活動の指導①」）。

## (3) テーマについてどう考えるか自分の考え（論）を書く

特別活動の内容についてそのあり方を考えさせたい回は、その回のタイトルを「〇〇論」とし、取り上げたテーマについて、自分はどう考えるかという内容を多く取り上げたワークシートを作成する。あり方を考える問いに対して学生は真剣に考え、意見交流を行っている。このような内容は代表で発表する学生の数も増やすようにする。筆者の考えも示すが、授業の感想でそれに触れているものもあり、そのような時には次回の授業の最初に応えるようにしている。ワークシートで取り上げたのは、例えば以下のような項目である。

- ①大差で負けている試合に控えメンバーを出さなかった監督についてどう考えるか（第4回「リーダーシップ論」）。
- ②望ましい人間関係の指導の7項目から一つ取り上げ、その重要性を論じよう（第5回「対人認知と対人行動」「特別活動論の指導原理」）。
- ③部活動は教育課程外の活動なのに全員の先生が顧問を担当させられるのはどうなのかという内田氏の指摘についてどう考えるか（第7回「部活動論」）

## (4) テーマについてどうしたいか自分の考え（プラン等）を書く

(3)はどうあるべきかを問う内容であったか、(4)はどうするかという指導内容・方法を問う内容である。自分ならどうするかという問いは、学ぶ側から教える側への視点の転換であり、教師として特別活動にどう取り組むかという立場で考えさせるようにする。このような問いは学生にとっては難しく、教師の仕事における創造性の大切さを感じるとともに、今まで教えてもらった先生方の指導の姿勢や工夫に改めて目を向けるようになったと思われる。ワークシートで取り上げたのは、例えば以下のような項目で

ある。

- ①料理クラブの担当として1時間の計画を立てよう（第6回「クラブ活動の指導」）。
- ②部活動の顧問として、どんな部活づくりをしていきたいか（第7回「部活動論」）。
- ③児童集会または生徒会活動の企画を考えてプランをまとめよう（第8回「生徒会活動の指導」）。

#### (5) 授業内容や活動を通しての学びや感想を書く

15回の授業の内容のまとめりごとに、小活として、まとめや学んだことを書かせて交流させるようにしている。ワークシートでは、例えば以下のような項目を取り上げた。

- ①特別活動の意義について、考えをまとめてみよう（第2回「特別活動とは－歴史－」）。
- ②指導案のグループ検討を通して学んだことや感想を書こう（第13回「学習指導案の検討」）。

第4章と第5章では、2つの例を取り上げて少し詳しく紹介し、考察を加える。

### 4 部活動の全員参加についてどう考えるか（③のタイプ）

近年、中学校・高等学校の部活動について様々な問題が指摘されている。中・高教諭免許状取得希望者が多い本授業では、部活動のあり方について考えさせたいと考え、第7回の授業のテーマを「部活動論」とした。部活動の歴史的経緯と現行学習指導要領での位置付け、部活動に対する調査結果や近年の部活動に対する議論を紹介した上で、「部活動の全員参加についてどう考えるか」についてワークシートに記入させ、意見交流・全体発表を行った。例えば次のような意見が出された。

- 部活動に参加することで授業では身に付けることが難しい「友情」や「思いやり」「礼儀」などといった社会的な能力を育むことができる。部活動は有意義なものなので全員が部活動に参加するのはいいことだと思う。
- 部活動は教育課程外の活動であるため、全員が強制的に部活動に参加する必要はない。また、強制的に参加させると本当は入りたくない部に嫌々入ったという生徒も増え、結果的に部活動への意欲も下がる。

このように賛否は分かれ、その理由は例に示した以外の視点からも多く出された。中間的な意見も出される。考えが対立する内容を取り上げ、意見を交流させることで、学生は主体的に授業に参加でき、自分とは違う考えに触れて考えが深まったとしている。また、部活動については、教師の側から全員が部活動を担当することの是非について意見交流を行ったが（第3章参照）、これについても意見は様々に出され、部活動は中学校・高等学校の教師を目指す学生にとって取り上げる必要があるテーマであると感じられた。

### 5 学級活動指導案のグループ検討を通して（⑤のタイプ）

学級活動については、その内容や指導法、1時間の授業の組み立てや指導案作成のポイント、実践事例を解説した後、学級活動(2)「適応と成長及び健康安全」の指導案を作成させ（授業時間+課題）、完成した指導案についてグループ検討を行った。4人グループとなって自分以外の3人の指導案を読んでよい点や改善点等をコメント用紙に書いた後、一人の指導案についてコメント用紙に書いたことを発表し、それをもとにさらに話し合いをする（1人あたり3分半程度）活動を順番に行っていくという流れである。この指導案はグループ検討での指摘・学びをもとに修正を加えた上で提出させるようにした。

グループ検討を終えての感想を書いたワークシートは次のような記述があった。

- めあてとまとめがあった方がよいという助言をもらい付け足した。めあてがあることで児童がどのようなことを学ぶか心に留めて授業に臨めてよい指導案になったと思う。他の人の指導案はとても勉強になった。
- 自分で指導案を作成するだけでなく、他の人に見てもらって意見をもらうことによって新しい発見があると思った。このようにしてお互い添削することをこれからもぜひやっていきたいと感じた。これからはもていねいな指導案づくりを心がけたい。
- 3人の指導案を見せてもらえてとても勉強になったし、工夫している点がみなさんそれぞれあったので見習おうと思ったし、工夫した点をほめてもらえて純粋にうれしかった。

指導案のグループ検討は学生にとって初めての経験だったようである。履修者が多くて模擬授業を行えないために取り入れている活動であるが、他のメンバーの指摘から学べるとともに他のメンバーの指導案からも学ぶことも多いという肯定的な感想がほとんどであった。

## 6 おわりに

本稿では、ワークシートの活用と意見交流を取り入れた特別活動論の授業の取り組みについて述べてきた。学生が書いた内容や取り組みの様子からある程度学生の主体的な取り組みを促すことができたと考えている。特別活動論の授業として、ワークシートで取り上げた内容の妥当性や意見交流のさせ方については課題や改善点が多いことは十分承知している。しかし、第15回目の授業（テスト）において書かせた「特別活動論」の授業を通して学んだことや考えたこと」に以下のような文章があった。

- 教科が一番大切だと思っていた自分が、この授業を半年間受けたことで、特別活動の重要性に気づいて、自分が教師になった時どう授業を作ろうかなとワクワクしてきている。生徒の気持ちに残るのは特別活動が大きな割合を占めていることを踏まえ、これからの生活へと役立てていきたい。
- 「特別活動論」の授業では、たとえ教師にならなくても人生で役立つ授業だったと思いました。特に話し合い活動の内容については、私自身もより目標を持って生活を行っていこうと前向きになる授業でした。改めて多くのことを学び吸収できたと感じます。

この感想には、特別活動の理論・内容や指導法の理解だけに止まらず、特別活動の重要性を感じて実践への意欲を高めたり、特別活動論での学びをもとにこれから前向きに取り組んでいこうする姿勢が見て取れる。このようなことは、学生が中学校・高等学校の教師になったとき、特別活動を通して生徒に感じ取らせるようになってほしいと願うことであり、特別活動の本質である。これからも授業の充実を図り、学生にとって学ぶ意義を感じられる、教師に向けて意欲を高められる特別活動論の授業を目指していきたい。



# 神戸女子大学の「地域の学校支援」 —神戸市教育委員会発達障害等巡回相談事業との連携を通して—

文学部 教育学科  
准教授 谷山優子

## 1 特別支援教育 10年のいま

特別支援教育が学校現場で取り込まれるようになって10年がたちました。この10年の間に先生たちは、特別支援教育がどういうものなのか、学校はどのような支援体制を構築しなければならないのか、自分のクラスにいる発達障害のある子どもやそうかもしれない子どもにどのような支援をしたらいいのか、迷い考え真剣に向き合ってきたと思います。今では、特別支援教育の視点を持って、学級作りや授業に取り組むことが当たり前になっています。このような風潮の中、特別支援教育の研修会は盛況です。書籍や教材もたくさん販売されています。事例研究もたくさん発表されています。それでも、まだまだこの分野は奥が深いです。発達障害は、脳の中枢機能に何らかの原因があるといわれており、どの子どもも認知の困難さが見られます。このように困っている子どもにどう支援をしたらいいのかどの先生も研修後すぐに指導方法を色々工夫し、試していることでしょう。

今、特別支援教育で関心が集まっているのは、指導方法もさることながら、発達障害のある子どもたちの進路と就労です。生涯にわたる支援の必要性がこの10年でひしひしと保護者や本人、先生たちのなかで現実味を帯びてきたからでしょう。

目の前のちょっと変わったものの言い方や行動をするこの子どもに今、分かりやすい授業をすること、居場所のある学級作りをすること、そしてその子どもが就労するときに周りの人から理解され、職場に居場所と活躍の場があるような環境に置いてやれること、これらの見通しを持った指導と支援が重要です。

そのためには、本人が自分の特性（得意なことと苦手なこと）を理解するような支援と、違っている人を排除しない多様性が認められる社会作りがこれからは必要です。多様性が認められる社会は、障害のある人にもない人にも、子どもにも年を取った人にも暮らしやすい社会であることがわかってきました。

障害があってもなくても使いやすいというモノづくりについての考え方は「ユニバーサルデザイン」を生み出しました。このことを授業にも応用し、障害のある子もない子もわかりやすい「ユニバーサルデザインの授業」という指導方法の工夫が生まれました。近年、アメリカで「ユニバーサルデザインフォー ラーニング (UDL)」として取り込まれ始め、日本にも導入されつつあります。

大人も子どもも、物事を理解する認知の特性は様々です。そのような認知の特性を知り、一人ひとりが自分の得意な方法で理解するという多様な指導の方法があれば、一斉指導で「わからない」となっていたことも「わかった」「できた」が増えるのではないかということが期待できそうです。

## 2 学校の体制の構築

特別支援教育は、障害のある子どもをどう支援していくかを学校全体で支援体制を構築していくことも含みます。

一人の子どもの支援方法について、教職員全員の共通理解が必要です。そのためには、どんな支援をするかの指導計画（短期目標と長期目標やできるようになることの優先順位）を作成し、今、この子どもがどうなることを目標にしているか全教職員がわかって同一歩調の指導をしなければなりません。共通理解を図るために、校内委員会を定期的に開催します。このときに、特別支援教育コーディネーターが中心となって、校内体制を構築し、特別支援教育を推進していくのです。ただ、やはり校長先生のリーダーシップがもっとも重要です。

学校の教育目標に則って、どのような子どもを育てるかという学校経営のビジョンを描くこと、関係機関と連携していくこと、保護者や地域の人たちと協働すること、これらを校長先生は特別支援教育のビジョンを持って推進しなくてはなりません。このような時に、自分ひとりで学校が今どういう方向に向かっているかを判断し、先生を鼓舞していくよりも、客観的に学校の様子を見て助言してくれる専門家がいて心強いでしょう。「今学校が取り組んでいることがこのあとよい結果に結びつくと思われるから、このままやっていきましょう」とか「もう少し軌道修正して他のこともやってみたほうが、早く結果が出るかもしれませんよ」とかいう見通しがもてれば、リーダーシップをとる校長先生も、実際に子どもの支援をしている先生たちも希望を持って取り組みますし、実際に学校が良くなっていく実感が持てるでしょう。神戸女子大学の「地域の学校支援」は、このような場面でも連携できることをめざします。

## 3 発達障害巡回相談事業の活用

特別支援教育が始まると同時に、各自治体の教育委員会では、通常の学級に在籍している発達障害のある子どもの指導方法の助言等ができる専門家チームの派遣や巡回相談員の派遣を行っています。すべての学校に一斉に派遣するには予算措置が苦しく、毎年数校に派遣し、10年でだいたいすべての学校がこのような事業を受けたのではないのでしょうか。

神戸女子大学も、神戸市教育委員会と連携し、この事業に専門家として筆者が学校に伺わせてもらっています。支援員として、本学の学生も学級に入らせてもらっています。今年度は2校の巡回相談に関わらせてもらっています。学校支援の方法は、学校の実情に応じて色々考えられますが、主に次のようなことを行っています。

- ・学校を訪問し、対象となる児童生徒や学校のニーズを聞き取り、授業や行動を観察し先生に対して指導方法に関する助言を行う
- ・校内における支援体制づくりへの助言をする
- ・個別の指導計画の作成に協力する
- ・管理職や特別支援教育コーディネーター、学年集団の悩みの相談にのる
- ・学校の実態に応じた児童理解や指導方法についての校内研修を行う
- ・保護者対応のしかたやアドバイスの仕方についての助言を行う

- ・神戸市教育委員会のもつ支援の活用について助言する
- ・効果的な研究授業の持ち方や実施、検討会などの助言をする

1回の巡回相談ですぐにうまくいくものでもないですが、助言を受けることで先生たちの迷いが吹っ切れたり、疲弊していたことが新たな視点を持つことで元気になったりすることも多くあります。2回目の巡回で少し子どもが良くなってきたりすると、見えなかったゴールが見えてきたりします。先生の子どもの見方が変わると子どもの行動が変わることが実際にあります。支援方法の効果だけでなく、学級という環境の変化で子どもが変容したり、子どもが成長したりするのです。自分たちがやっていることが間違いではない、効果の出るものなのだとわかるだけでも、専門家のスーパーバイズを受けることは、学校にとってプラスになると考えます。どの学校もそういう支援を受けることができたらいのですが、特別支援教育の専門性だけでなく、学校経営についての専門性も併せ持ち、授業の指導方法や学級作りについても豊かな経験を持つ専門家は残念ながらそう多くはいません。このことも、特別支援教育の学校体制構築のための大きな課題であると考えます。最近では、発達障害のある子どもに限らず、被虐待児や学校への不適応、問題行動のある子どもなども巡回相談の相談対象になっています。これらの問題も、先生の子どもの見方が変わり、授業が変わり、周りの友達から認められ学級に居場所ができ、学校が変わることでよい方向に変わることがあります。特別支援教育の観点を活かすことで、どの子にもよりよい指導ができる可能性があります。

#### 4 どの子もわかる授業づくり

さいごに、どの子もわかる授業をすることで子どもを変えたいと全校あげて取り組んだA小学校の事例を簡単に紹介します。

A小学校では、クラスから飛び出したり、ネガティブな発言を繰り返したりする子どもが多く、対応に苦慮してきました。発達障害であるとか発達障害の疑いと診断されてくる子どもや教育センターや通級指導教室で支援を受ける子どもの人数も増加してきていました。そこで、今年度は校長先生のリーダーシップのもと、巡回相談事業を受けて、相談や助言を得ながら学校を変えていこうと強い意気込みで臨むことになりました。特別支援教育コーディネーターの先生も、落ち込んだり疲弊した先生たちの相談にのりながら一生懸命コーディネートを行いました。発達障害のある子どもの理解と支援についての研修を重ね、A小学校は、ユニバーサルデザインの授業の考え方を参考に、「どの子もわかる授業」を全員が行うことに決めました。たたき台にする研究授業は、漠然と参観しても観点がばらばらになるので、観点を絞り込んでチェックリストをつけながら参観することにしました。その授業の良かったところ、不足しているところを見出し、自分の授業はどうかフィードバックできるように筆者が助言しました。A小学校の実態から作成したチェックリスト案は表1の通りです。このように、授業で大事にしたいことを学校全体で共通理解をしておくと、経験の少ない若い先生も授業がしやすくなるというメリットがあります。たとえば、「めあてを明確に示す」というチェック項目を共通理解するだけで、全員が授業のはじめに「今日の授業のめあてはね……」と子どもたちに伝えられると同時に、授業がぶれずに最後のふりかえりまでもっていくことができます。わかる授業に必要な要素をチェックすることで、授業力が高まります。また、「見通しが持てるよう、授業の流れを明確にしておく」という授業の「形」

表1 A小学校 授業観察シート（案） ユニバーサルデザインの授業チェックリスト

授業の構成			
1	教室環境	授業に関係のない視覚的・聴覚的刺激を減らしている	
2	学習ルール	授業開始時に授業準備ができている	
3	目標の明確化	めあてが適切に示されている	
4	学習の流れの明示	授業の流れに見通しを持たせている	
5	時間の構造化	授業のなかで、子どもに時間がわかるように示している	
6	前時の確認	授業開始時に前時のふりかえりや導入に工夫している	
7	ワークシートの利用	子どもの実態に応じたわかりやすいワークシートを用いている	
8	視覚聴覚の情報	視覚や聴覚に訴える工夫がされている	
9	発表のルール	発言、発表のルール、聞くルールが浸透している	
10	発問の明確化	発問がわかりやすい、なぜそうなるか意味づけされている	
11	ペア・グループ活動	学び合いの時間が確保されている	
12	自己評価	ふりかえりの時間が確保されている	
13	時間の細分化	スモールステップでいくつかの課題設定がされている	
教師の活動			
14	指示・発問	短く簡潔でわかりやすい	
15	板書の工夫	板書が工夫されている	
16	説明	具体的にわかりやすく丁寧な指示や示範がされている	
17	言葉がけ	子どもに応じて認めたり励ましたりほめたりする言葉がけがされている	
18	教材・教具	子どもの作業環境（机上・動線・安全・衛生・効率）に配慮している	
その他			
19	評価の観点	評価の観点に基づき本時のねらいが達成されている	
20	支援の工夫	授業で子どもへの支援に工夫と配慮がなされている	
21	支援員の活用	支援員の活用が効果的になされるよう指示できている	

をどの学年も行うようにしておくこと、発達障害のある子どももいない子どもも学年が変わっても見通しのもてる授業を安心して受けることができるという効果があります。チェック項目が多くても大変なので、できそうなことをリストアップしてみましょう。PDCA サイクルで、チェック項目を精選していくと洗練されたものになっていきます。

## 5 おわりに

特別支援教育は、一人ひとりの子どもに違う支援をするから労力が大きいとか、人手が足りないとか、愚痴はたくさんあつたりしますが、この10年間、どの先生もほんとうに熱心に特別支援教育について研修を受けてきたと思います。先生が変わり、子どもが変わる、そういう教育の営みの基本に立ってみましょう。少しやり方を変えるだけで、たくさんの子どもの理解できる授業をすることは可能なのではないのでしょうか。ユニバーサルデザインの考え方を活用して、A小学校のように、大学等と連携し、まずは気軽にどんどん授業改善に取り組んでみませんか。子どもたちの障害をなくすことは私たちにで

きません。しかし、私たちの支援で子どもたちの障害を改善・克服することができるのです。

#### 参考文献

- ・ 谷山優子「問題行動の早期発見」林尚示編著『新・教育課程シリーズ生徒指導・進路指導』一藝社、2014
- ・ 谷山優子「子どもの発達と生徒指導」同上
- ・ 篠原清昭「学校改善マネジメント～課題解決への実践的アプローチ～」ミネルヴァ書房、2012年
- ・ 文部科学省『生徒指導提要』教育図書、平成22年。
- ・ 文部科学省ホームページ「特別支援教育の体制整備の推進」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/main/006/1294930.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/006/1294930.htm)
- ・ 神戸市教育委員会ホームページ「こうべ学びの支援センター」  
<http://www.city.kobe.lg.jp/child/special/suishin.html>

## 家庭科教育と「持続可能な社会」

家政学部 家政学科  
教授 田 中 陽 子

本稿では「兵庫県中学校技術・家庭科研究大会」(10月28日(金)、於太子町立太子西中学校)において筆者が参加した分科会「C 衣生活・住生活と自立、D 消費生活と環境」での研究報告に示唆を得て、中学校家庭科における「和装」および「消費者市民社会」に関わる教育を「持続可能な社会の実現」に関わらせて考えてみたい。

家庭科が対象とする生活の営みに係って重視される見方・考え方のひとつに持続可能な社会の構築がある。「持続可能な社会」は、「健全で恵み豊かな環境が地球規模から身近な地域までにわたって保全されるとともに、それらを通じて国民一人一人が幸せを実感できる生活を享受でき、将来世代にも継承することができる社会」と定義される(平成18年第3次環境基本計画)。それは、豊かな環境を現在および将来世代にまで継承できる社会を形成するために、わたしたちの生活を地球規模で見直すことを促している。

日常着を対象とする中学校家庭科衣生活教材に和服が導入されたのは、平成20年改訂の学習指導要領で「和服の基本的な着装を扱うこともできる」ことに由来する。また次期学習指導要領では、「伝統や文化に関する教育の充実」に伴って「和装」の取り扱いが重視されようとしている。では、日本の伝統文化としての和装は、持続可能な社会に向かう教材としてどのように関わることができるのだろうか。持続可能な社会の構築は人間生活にともなう文化的側面を考慮に入れずに論じることはできない。なんとなれば、伝統文化の尊重によってもたらされる文化創造力は国境や時代を超えた多様な文化との出会いによって萌芽すること、伝統文化にある生活の知恵は環境倫理として、さらに現代および将来の文化的環境を保持していくための知恵となること等をみれば明白である。教材としての和装は、単に着ることが目的ではなく、生活文化の継承を目指すものである。日本人は明治期以降、幾度となく洋服と和服の選択をめぐって議論した。しかし、持続可能性の論点から考えると洋服と和服の両方を文化の多様性として維持することが重要となる。

「消費者市民社会」は、「一人ひとりの消費者が、自分だけでなくまわりの人々や、未来の人々の情況、内外の社会経済状況や地球環境まで思いをはせて生活し、社会の発展と改善に積極的に参加する社会」(『新技術・家庭 家庭分野』教育図書)と定義されている。社会的な浸透は未だ充分とは言えない「消費者市民社会」であるが、中学校家庭科では「今の自分の消費行動が世界で起こっている様々な問題とどのようにつながっているのか、考えてみましょう。たとえば、安い価格の背景に、不当な取引や環境汚染、自然破壊、児童労働などの問題が含まれているかもしれません。わたしたちが批判的な意識や社会的関心をもち、責任ある消費者として行動することで、事業者の製品開発や販売方法の改革を促し、それが消費者市民社会をつくることにつながります。」(『技術・家庭 家庭分野』開隆堂)というように、自分の生活と社会的な問題をつなぎ、消費者としての責任ある消費行動が「消費者市民社会」の実現を可能にすることを理解していく。家庭科では、持続可能な社会は持続可能な消費と生産の実現なしにはありえないことや、持続可能な社会の実現には消費者が消費者市民社会の形成者として積極的に参画していくことが求められていることを学んでいく。